御堂筋アートプロジェクト「ノビル眺め」

―都市空間を揺さぶるための対話術―

谷　悟

はじめに

2006年10月３日から13日まで、御堂筋（淀屋橋～本町）界隈において、「御堂筋アートプロジェクト ノビル眺め」を開催した。本企画は、大阪芸術大学・ラジオ大阪の主催、大阪市・（財）大阪21世紀協会の共催、御堂筋まちづくりネットワークの協力によって催されたものである。この取り組みは、中之島公園及び御堂筋エリアに活力を漲らせることを目的とした都市文化振興事業「大阪水都ロマン」の御堂筋ART AVENUEを構成する主要プログラムとして展開されたものである。

私が総合ディレクターを務め、グランドテーマの設定及びクリエイターの選出、展示スペースのための交渉や広報まで、アートプランニング／マネージメント業務全般を担当した。また今回は、上記の作業を進めると同時に作品を創作する立場としても参加した。なお、運営については大阪芸術大学芸術計画学科の学生、卒業生により編成した大阪芸術大学御堂筋アートプロジェクトコミッティがあたった。

本稿では、実施概要を報告するとともに、この実践を通じて導き出されたビジネス街におけるアートプロジェクトの可能性について見解を示すものとする。

１．コンセプト

本プロジェクトを展開させる上で最も大切にしたことは、“フィールドワークからはじまる御堂筋ならではのアート”という姿勢である。御堂筋や会場となる建築物と充分に対話をした上で、＜場＞に棲息する気配を読み取り、ここでしか成立し得ない表現にこだわりたいと考えたからだ。単に街を装飾するために作品を展示するのではなく、御堂筋を新たな視点で問い直すことを基本コンセプトとした。

グランドテーマは、高く伸びるビル群やどこまでも延びる車の流れ、日々伸び（成長）し続けるイチョウ並木、更には、たえず背伸び（向上）しようとするビジネスマンの姿や、大いに業績を伸ばそうとする企業の様子が御堂筋から観測されることから、「ノビル眺め」とした。“ノビル”には上記にあげた意味の他に「“のビル”＝～のビルで催す」というニュアンスも含まれている。

２．作品概要

今回、参加したクリエイターたちは、視覚、聴覚、触覚、或いは五感全体で御堂筋と交わるあり方を考案したため、その表現メディアは多様となり、展覧会、コンサート、ワークショップ等の複合的プログラムで構成された。またそれらは、御堂筋（淀屋橋～本町）界隈の７ヶ所（図１参照）で展示され、そこで働く人々やこの場を訪れた人々にアートを遭遇させるかたちをとった。以下に各作品の企画趣旨や特徴を作家の言説を引用しながらまとめる。

①明星 守「2006 明星 守レポート～イメージ・フレームvol. 21～透過光景～直なる角」
明治安田生命 大阪御堂筋ビルLAND AXIS TOWER エントランス

通常、写真はオモテから見るものであるが、“透過光景”と題された本作品は巨大な写真（約３m×1.2m）

図-1　開催エリアマップ

を両面から鑑賞するインスタレーション表現である。その特性を成立させるため、大判ガラスで形成されたLAND AXIS TOWERの出入り口に展示した。また、展示スペースの前にあるイチョウの木を被写体とすることで、明星氏は「写真の静止した空間と眼の前の動きつづける空間の交差軸…混在した感覚が生まれれば…」というコンセプトを具現化した。「外の風景は時間の中で反射光にささえられ、写真の風景は空間の中で透過光にささえられている」という明星氏の言説を体感させる作品であった。

なお、この作品については、ワークショップの拠点となるＮＭプラザ御堂筋エプソンスクエア御堂筋のショールームウィンドーにも展示した。コンセプトは同じであるが、ワークショップ（３．特別プログラム ②

写真-1　LAND AXIS TOWER前のイチョウの木

写真-2　明星 守「2006 明星 守レポート～イメージ・フレームvol. 21～透過光景～直なる角」

を参照）のイメージを伝達するバージョン（２点）が新たに制作された。

②青絲亭十大阪芸術大学御堂筋アートプロジェクトコミッティ「ノビル眺め―雑草をのばす―」
明治安田生命 大阪御堂筋ビル LAND AXIS TOWER

LAND AXIS TOWERのエントランスは非常に広く、伏見町３丁目と４丁目（御堂筋側）を通り抜けられるように設計されている。その特性を生かし、日々のびていくインスタレーション作品が展示された。御堂筋の土[1]を入れたガラス瓶に御堂筋で採集した雑草を移植し、並べていく。1週間かけて西側～東側へ進み、御堂筋へ辿り着くというものである。全てを制御しようとする都市空間において、したたかにのびる雑草を見つけ、コレクションするこのガーデニング・アートは生命を純化させる行為であるとともに御堂筋における生態系の断片をヴィジュアライズさせるものである。

③青絲亭十大阪芸術大学御堂筋アートプロジェクトコミッティ「ノビル眺め―御堂筋を眺める―」
武田御堂筋ビル ウィンドー

本作品は、“御堂筋×ノビル”をテーマに紡がれた言葉やイメージを編集したものである。創作手順は、フィールドワークにより浮上した５つのポイント（イチ

写真-3　御堂筋の雑草

写真-4　青絲亭十大阪芸術大学アートプロジェクトコミッティ「ノビル眺め―雑草をのばす―」

ョウ、ビジネスマン、ビル、道、彫刻）に対し、キーワード（景観、うつむく、垂直、六車線、寂しい…etc）をいくつも出した。また、リサーチ時に撮影した写真の中から象徴的なものをチョイスし、５つのボード上に統合。それらを連結させ、屏風のような形態で展示した。

④北峯 知枝「ムソウスルキノコ」

大阪ガスビル 東側道路の柱

黒い大理石の柱が綴じ合わさったくぼみに、白いキノコを群生させるかたちで作品を展示した。それは、布の中に綿を入れて縫うことで仕上げられたソフトスカルプチャーである。また、２つの黒い壁にはムクムク伸びる白いキノコのイラストレーションを展示した。これらの作品はクールな都市に不思議な空気を漂わせ、通行する人々の足を止めた。「ノビルと視点が変わる。視点が変われば何かが見つかる」と言う北峯氏の言説は“ノビル”が未来を拓く大きなキーとなることが伺える。

写真-5　水谷 フミカ「つつまれる表皮」

⑤水谷 フミカ「つつまれる表皮」

竹中工務店大阪本店御堂ビル ウィンドー

御堂筋にあるイチョウ並木の表皮をよく見ると、非常にグロテスクな様相を呈していることに水谷氏は気付く。「外敵から身を守る使命をおびたゴツゴツとした表皮」と言う水谷氏のコトバには木々たちが活発に細胞を作動させながら、都市に対するプロテクターを形成させる本能に関心を寄せたことが伺える。また、「こわばった木の表皮をほどき、つつんでやりたい」と言う言説には都市と自然の拮抗状態からの脱却を誘うほのかな安息のイメージが漂う。作品は繊維素材、レースペーパーを不定形（アモルフ）にミシンがけすることで奇妙な凸凹感を生じさせ、無数の皺で表皮の質感をかたちつくっていた。それは垂れ下がる糸、毛糸で編まれたネット状のオブジェ等を全て麻紐で宙吊りにするインスタレーション表現として４つのウィンドーに展示された。

⑥酒田 真弓「ガーデン」

銀泉備後町ビル エントランス

透明なアクリルBOXの底部から１輪の小さな造花が上を向いて伸びる。また、上部にはその気配を左右からつかもうとするかに見えるリアルな人の手が伸びる。「ガーデン」と名付けられたこのメタフィジカルな作品

は、都市に対する制御のあり方に問いを投げかけているように感じられる。酒田氏の「なぜ、花は“花壇”として囲わなければ街にあり続けることができないのか」と言う言説には、行儀良く、予定調和的に咲く花以外は摘み取られかねない危うさを指摘している。都市における花の存在は、愛で癒されるゆとりの象徴として自明化されているが、それにしか触れようとしない事実に違和感をつのらせた表現といえるのではないだろうか。

⑦坂田 貴広「Fluid」

銀泉備後町ビル 農林中央金庫大阪支店 ウィンドー

御堂筋は北～南へと車が流れる巨大な一方通行道路である。坂田氏は、それを「御堂筋という大河」と呼ぶ。“Fluid”、即ち、流体、流動体というタイトルがつけられた作品は、車のライトから放たれる光の帯で埋まる深夜の御堂筋を撮影したものである。縦長の巨大サイズ（約 3 m×1.2m）に出力された写真は極めてダイナミックであり、どこまでものびていくパースペクティヴ感を表したものである。

3．特別プログラム

①「サキタハヂメのこぎりコンサート」

出演：サキタハヂメ　プロデュース：宮地 泰史

明治安田生命大阪御堂筋ビル　LAND AXIS TOWER エントランスホール

10時12日（木）12時15分～12時45分

ミュージカルソウと称すのこぎりを用いたコンサートを開催。プロデュースを担当した宮地氏は、この楽器の特性について、「Musical Sawは、他の楽器のように共鳴胴を持っていないので、演奏する場所で全く異なった響きがする」と解説する。また、「ポルタメントを多用した演奏法では平均律に調整された音以外の音がメロディに独特の色を加味し…まさに音が“ノビル”ようであり、音が空気を震わせながら拡散していく」

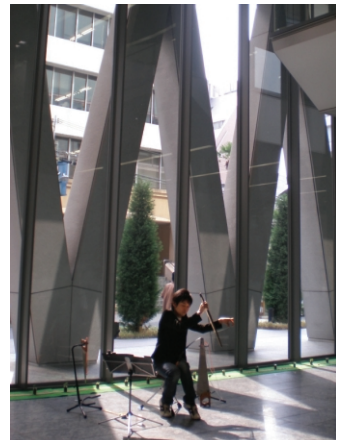

写真-6　「サキタハヂメのこぎりコンサート」

と説明する。これは、演奏後にサキタ氏が「ビルが鳴った。のこぎりの音から発せられた音がビル全体と共鳴し、場全体が楽器のように震えた」という風に語っていたことからも伺える。ノビル音で満たされたオフィスビルは一瞬、日常から逸脱した異空間と化し、音楽のために用意されたしかるべき場所以外にも極上の演奏空間があることを発見できた取り組みであった。

②「イチョウの木になるワークショップ」

ナビゲーター：明星 守

ＮＭプラザ御堂筋　エプソンスクエア御堂筋前

10月12日（木）15時00分～16時30分

光合成のシステムを図解化したイラストが描かれた小さな黒板を持ち、イチョウの前に立ち、イチョウと一体化するワークショップを実施した。なお、その姿を明星氏が写真撮影し、エプソンの協力によりその場で出力、参加者にプレゼントするかたちをとった。御堂筋を行きかう人々に企画趣旨を伝えると、興味をもった市民（老夫婦、ビジネスマン、デザイナー、ＮＰＯ代表など約15人）が参加してくれた。３本のイチョウの木の前に３人が同時に立つ姿は、パフォーマンス・アートとしても十分に成立していた。和やかな空気のもと、御堂筋やアートについてコミュニケーションが交わされる時空間を創出することができた。

写真-7　「イチョウの木になるワークショップ」写真撮影する明星 守氏

写真-8　ワークショップに参加する筆者
©明星 守

③トークセッション「“ノビル”アートへの想い」

ゲスト：出品作家、中脇 健児

コディネーター：谷 悟

トークセッションの前半は、本プロジェクトに参加した各作家から出品作品のコンセプトが語られた。また、中脇氏から各々の作品に対するコメントが述べられ、クロストークへと発展していった。後半は、“御堂筋のリアリティを踏まえたアートの可能性や企業による芸術文化支援（オフィスビルにおけるコミッションワーク）、まちづくりとアートの力などについて討議がなされた。参加者はあまり多くはなかったが、上記のテーマに関心を寄せている1級建築士、イベントディレクターや本学卒業生、スタッフなどが集まり、意見交換できた。

4．まとめにかえて

本プロジェクトは、“アートやイベントでまちを活性化させたい”と言う大阪市他からの要請を本学が受けるかたちで実施されたものであった。アートを社会に開く姿勢は、今後の芸術のあり方を考える上でも極めて重要なテーマであり、思索を深めていく必要があろう。しかし、「オフィスビルで働く人々はアートを欲しているのか？」という疑問が頭をよぎる。多忙な毎日を送るビジネスマンに“アートでゆとりを！”という図式も理解できないわけではないが、戦場であるオフィスビルにそのような余裕はあまり感じられなかった。残念ながら、現段階では御堂筋というまちが積極的にアートを育み、アートの力で御堂筋の再発見を試みようとする環境[(2)]はほとんど整備されていない。

その温度差をひしひしと感じながら私は交渉を進めていったのであるが、いくつかの企業ではクールでオフィシャルなビジネス空間にとんでもないモノが持ち込まれるという危機感が先行し、安全管理対策も含め、許可申請に多くの時間を費やさざるを得なかった。また、使用が認められない場合は、直ちに代替スペースを見つけ、作家の個性と場のマッチングを再構成する必要があった。そのため、作品制作に取り掛かるのが遅れ、制作時間が大幅に短縮されることとなった。苛酷な準備を終え、ようやく迎えた搬入日、更には会期中に至っても、担当者から作品の展示形態の変更を告げられたり、マニュアルを忠実に守ろうとする警備担当者にきついことを言われたりすることもあった。《藝術》のための場でないがゆえに、多くの制約と対峙することが必須となるが、メランコリックな状態に陥りながら、アートと社会の平衡感覚を保つことはすこぶる困難であった。

しかし、日を追うごとに、コミュニケーションを重ねることで相互理解しようとする空気が生じはじめ、協力して運営をおこなうことができたことは大きな収穫であった。アートプロジェクトは、共にわかりあい

たいと思う気持ちが芽生えはじめてから着手すべきものであることを改めて痛感した。本来、このような取り組みは依頼されてからある程度の時間をかけて、本気で関わりたいと思うアーティストと企業のみが力を結集させて実施すべきものではなかろうか。それは新たな価値観を創出させるアートの力を信じ、大切に育てるもので、“なんとなくアート”的なものを次々と消費させるものではないように思う。真の意味で、“まちの活性化”へと繋げるためにはそれなりの覚悟が必要となるだろう。

おわりに

御堂筋と根源的に向き合い、作品の制作／展示・演奏にこだわった本プロジェクトは、“ただ、やればいい！”という次元を超えた１つの挑戦であった。しかし、時間＆私の力不足により納得のいかない部分があったことは否めない。また機会があれば、今回築きあげたネットワークを生かしてユニークなアートプロジェクトを展開させたいと思う。

最後になったが、本稿に掲載した写真（©表示を除くもの）は、坂田 貴広氏及び青絲亭によるものであり、編集（アレンジ、校正含む）については青絲亭の水谷文香氏の手を煩わせた。心から謝意を表す次第である。また、大阪のメインストリートでアートプロジェクトを実施する機会を与えていただいた塚本 邦彦学長・理事長をはじめ、いつも活動を見守り、御協力いただいた工藤 皇事務局長、更にはお世話になった共催、協力団体のスタッフおよび会場協力をお願いした各企業の担当者の皆様に深く感謝したい。

註

(1) 明治安田生命 大阪御堂筋ビル LAND AXIS TOWERの北に位置する淀屋橋地区再開発ビル（都市再生機構）の建設工事現場で採掘された土を特別に提供していただいた。なお、この土地は大阪市最古（明治5年創立）の大阪市立愛日小学校跡地である。

(2) 御堂筋にある企業により結成された御堂筋まちづくりネットワークは、御堂筋彫刻写真コンテスト、同展覧会、まちかどコンサート及びガーデニング・アート展などを継続的に催している。御堂筋が“活力と風格あるビジネス街”として発展することを目的とした取り組みである。しかし、現代アート系のプログラムを積極的に企画し、それをインキュベートする体制が存在しないという意である。

参考

(1) 出品作家、ゲスト、スタッフは全て大阪芸術大学（芸術計画学科、美術学科、写真学科）、同大学院の学生、卒業生、教員である。

出品作家
青絲亭
北峯 知枝
坂田 貴広
酒田 真弓
水谷 フミカ
明星 守

ゲスト
サキタハヂメ（日本のこぎり音楽協会関西支部長）
宮地 泰史（(財）河内長野市文化振興財団事業室）
中脇 健児（(財）伊丹市文化振興財団）

スタッフ
金津 由里恵
三嶋 義秀
安田 織会
酒井 宏憲
福井 まどか
木村 美樹
浜田 恵里加

(2) 報道実績
2006.10.5 「OBC jamjam Store」（ラジオ大阪）
2006.10.9 「ラジオ大阪秋祭り」（ラジオ大阪）
2006.10.10 「KANSAI1週間」（第8巻/第21号 講談社）
2006.10.12 「産経新聞」（朝刊）
2006.10.12 「SankeiWeb」（産経新聞）
2006.10.13 「毎日新聞」（朝刊）